論文

トマス・アクィナスにおける「枢要徳」
―『神学大全』第 II-I 部を中心に―

菊　地　伸　二

はじめに

13 世紀の神学者であるトマス・アクィナス（以下、アクィナスとする）は、「枢要徳」についてどのように理解しているのであろうか。その晩年の主著である『神学大全』第 II-I 部に即して、このことを考察することが本論文の目的である。

ところで「枢要徳」とは何であるか。それは、具体的には「知慮 prudentia」「節制 temperantia」「剛毅 fortitudo」「正義 justitia」の四つの徳を指しており、「四元徳」と呼ばれることもあるが、それは古代ギリシア哲学に由来するものであり、なおかつ、キリスト教の哲学、いわゆる古代教父の哲学や中世の哲学に対しても大きな影響を及ぼすことになる主要な徳であると言ってよいだろう。

＊

ところで、アクィナスは「枢要徳」について、『神学大全』第 II-I 部第 61 問題（以下、とくに断わりがない限りは、第 61 問題とのみ示すことにする。他の問題についても同様である）において扱っている。「枢要徳」をめぐっては、次のような五つの問いが立てられている。

第 1　諸々の倫理徳は枢要的もしくは主要的と呼ばれるべきか[1]

第 2　それらの数について

第 3　どのようなものがあるか

第 4　それらは相互に異なっているか

第 5　それらが国家社会的、浄化的、浄魂的、および範型的諸徳へと分類されるのは適当であるか

もちろん、これらの問いについて一つ一つ考察しなくてはならないが、それに先立って、アクィナスにおいてそもそも「枢要徳」がどのようなコンテクストで問題にされているかということについて注目しておく必要がある。そこでまずは、第 55 問題「徳の本質について」の序文を見ることにしよう。

それによれば、第54問題までは、習慣habitusの問題が取り上げられており、アクィナスによれば、それは善・悪によって区別されるものであり、まずは善い習慣、すなわち諸々の徳と、それらに結びついているところの他のもの、つまり、諸々の賜物、諸々の至福、および聖霊の結実について扱われる。そしてその善い習慣の後に、諸々の悪徳と罪について扱われる。

第55問題から、善い習慣としての徳について論じられることになるが、この徳についてはさらに五つの観点から論じられている。

第一に徳の本質について（第55問題）、第二に徳の基体について（第56問題）、第三に諸々の徳の分類について（第57問題～第62問題）、第四に徳の原因について（第63問題）、第五に徳の若干の特性について（第64問題～第67問題）である。

いわゆる「枢要徳」について扱われるのは、第三の観点である「諸々の徳の分類について」という箇所であるが、「枢要徳」についての理解を知る前に、わたしたちはアクィナスと共に、徳そのものの理解について、ことに、第一から第三の観点までの部分を明らかにする必要があると思われる。

そこで以下、次の順で話を進めていくことにする。

1．徳とはいかなるものか
2．徳が成立するところ
3．徳の分類をめぐって
4．枢要徳とは
5．対神徳とは
6．アクィナスの枢要徳
おわりに

1．徳とはいかなるものか

第55問題は「徳の本質について」という表題が付されている。この問題はさらに四つの項から成り立っており、次の通りである。

第1　人間的徳は習慣であるか
第2　それは作用的習慣であるか
第3　それは善い習慣であるか
第4　徳の定義

これらの項では、どのようなことが主張されているのであろうか。

第 1 項では、人間的徳は習慣であることが言われる。

第 2 項では、それが身体に属することはできず、霊魂にとって固有的であるところのものに属しており、働き･作用への関連を含意することから、作用的習慣であると言われる。第 3 項では、徳は能力が完成された状態であり、いかなる事物の徳も、その事物が到達しうる極限である以上は、善いものでなくてはならないことから、人間的徳は善い習慣であり、善をなさしめるところの習慣である。こうして三つの項で人間的徳についての性格規定がなされる。

第 4 項では、徳とは「それによって人が正しく生活し、なんびともそれを悪用することはなく、それをわれわれのうちに、われわれなしに生ぜしめるのは神であるところの、精神の善い質である」という徳の定義が支持される。

2．徳が成立するところ

第 56 問題は「徳の基体について」という表題が付されている。この問題はさらに六つの項から成り立っており、次の通りである。

第 1　徳の基体は霊魂の能力であるか

第 2　一つの徳が数多くの能力のうちにありうるか

第 3　知性は徳の基体たりうるか

第 4　怒情的および欲情的能力は徳の基体たりうるか

第 5　諸々の感覚的な認識能力は徳の基体たりうるか

第 6　意志は徳の基体たりうるか

これらの項では、どのようなことが主張されるのであろうか。

第 1 項では、徳の基体は霊魂の能力であることが言われる。

第 2 項では、一つの徳が複数の能力のうちにあることは不可能であることが言われる。

第 3 項では、知性が徳の基体であることは可能であるかが問われ、その可能性が示される。知的徳と呼ばれるのはまさにそのような徳であると言えるだろう。

第 4 項では、怒情的および欲情的能力が徳の基体であるかが問われ、こうした感覚的欲求能力が、その本性上、理性に服従するものであり、理性を分有するものである限りにおいて、人間的な徳の基体でありうると言われる。

第 5 項では、諸々の感覚的な認識能力については徳の基体とはなりえないと言われる。

第 6 項では、意志もまた徳の基体となりうることが言われる。

第 56 問題は、六つの項を通して、徳が成立するところは必ずしも一様ではないことが言われる。

3．徳の分類をめぐって

第 57 問題の冒頭では、「次に考察すべきは諸々の徳の区別である。すなわち、第一に諸々の知的徳に関して、第二に倫理徳に関して、第三に対神徳に関して」と言われ、徳がいくつかに分類されることになる。そしてそれは、第 57 問題から第 62 問題まで続くが、並べると次のようになる。

第 57 問題　知的徳について

第 58 問題　倫理徳と知的徳との区別について

第 59 問題　倫理徳と情念との関係について

第 60 問題　倫理徳相互の区別について

第 61 問題　枢要徳について

第 62 問題　対神徳について

本論文の考察の中心は、第 61 問題の「枢要徳」ではあるが、その「枢要徳」がどのようにして描き出されるかを見るために、第 57 問題から順に辿ってみることにしたい。

＊

第 57 問題の「知的徳」に関しては、大きく六つの項から成り立っている。

第 1　諸々の思弁的な知的習慣は徳であるか

第 2　それらは知恵、学知、および直知の三つであるか

第 3　技術なる知的習慣は徳であるか

第 4　知慮は技術とは異なった徳であるか

第 5　知慮は人間にとって必要・不可欠な徳であるか

第 6　思慮深さ、賢察、および明察は知慮に結びついた徳であるか

これらの項では、どのようなことが主張されるのであろうか。

第 1 項では、諸々の思弁的な知的習慣は徳であることが言われる。

第 2 項では、それらの思弁的な知的徳とは、知恵、学知、および直知の三つであることが言われる。

第 3 項では、技術という知的習慣もまた徳であることが言われる。

第 4 項では、知慮は技術とは別の徳であることが言われる。

第 5 項では、知慮は人間にとって必要・不可欠な徳であることが言われる。

第 6 項では、思慮深さ、賢察、明察もまた、知慮に関連づけたものであることが確認される。

*

第 58 問題の「倫理徳と知的徳との区別」に関しては、大きく五つの項から成り立っている。

第 1　すべての徳が倫理徳であるか

第 2　倫理徳は知的徳から区別されるか

第 3　知的徳－倫理徳という区分は徳の区分として充分なものか

第 4　倫理徳は知的徳なしにありうるか

第 5　逆に、知的徳は倫理徳なしにありうるか

これらの項では、どのようなことが主張されるのであろうか。

第 1 項では、すべての徳が倫理徳であるかどうかが問題にされ、すべてが倫理徳であるわけではないことが言われる。

第 2 項では、倫理徳と知的徳とが区別されるものであるかどうかが問題にされ、倫理徳は知的徳から区別されることが言われる。じっさい、主文の最後の部分では、次のように言われている。「このようなわけで、人が善く行為することのためには、理性が知的徳という習慣によって善く秩序づけられるだけではなく、欲求的なちからもまた倫理徳という習慣によって善く秩序づけられることが必要とされるのである。それゆえに、欲求が理性から区別されるのと同じような仕方で、倫理徳は知的徳から区別されるのである」と。

第 3 項では、そもそも知的徳と倫理徳という二つの区分が徳の区分として充分なことであるかどうかが問題にされ、それについては、人間的徳とは、人間を完成して善く行為させるところの何らかの習慣であり、人間のうちにあるところの人間的行為の根源は、知性もしくは理性と、欲求能力との二つの他にはなく、人間的徳はすべて、これらの根源のうちの或るものを完成するものでなければならないことから、人間的徳が人間の善い行為へむけて思弁的もしくは実践的知性を完成するものであれば、それは知的徳であり、欲求的部分を完成するものであれば、倫理徳であり、したがって、人間的徳は、知的徳であるか倫理徳であるかのいずれかであると結論づけられるのである。

第 4 項と第 5 項では、倫理徳は知的徳なくしても成立しうるか、またその反対に知的徳

は倫理徳なくしても成立しうるか、ということが問題にされ、いずれも否定的な結論が出されるのである。とくに第4項では、倫理徳は直知および知慮なしにはありえないことが言われ、第5項では、知慮は倫理徳なしにはありえないことが言われるのである。

*

つづく第59問題と第60問題では、諸々の倫理徳相互の区別に関して論じられるが、第59問題の最初に述べられているように、情念に関わる諸々の倫理徳は、情念の多様性に基づいて区別されるものであるから、まずは、情念に対する徳の関係について考察がなされた後に、ついで情念に基づく諸々の倫理徳の区別について考察がなされなくてはならないことが言われるのである。

さてそこで、第59問題の「倫理徳と情念との関係」に関しては、大きく五つの項から成り立っている。

第1　倫理徳は情念であるか

第2　倫理徳は情念と共存しうるか

第3　倫理徳は悲しみと共存しうるか

第4　倫理徳はすべて情念にかかわるものであるか

第5　倫理徳の或るものは情念なしにありうるか

これらの項では、どのようなことが主張されるのであろうか。

第1項では、倫理徳は情念であるかどうかが問題とされるが、これについては、明確に倫理徳は情念ではないと言われるとともに、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の言葉を引いて、倫理徳は、「賢明な人が確定するであろうように、理性に基づいて確定された中庸に存するところの、選択的習慣である」と言われる。

第2項では、倫理徳は情念と共存しうるかどうかが問題とされるが、これについては、倫理徳は情念と共存しうると言われる。

第3項では、倫理徳は悲しみと共存しうるかどうかが問題とされるが、これについては、倫理徳は悲しみと共存しうることが言われる。

第4項では、倫理徳はすべて情念にかかわるものであるかどうかが問題とされるが、これについては、たとえば、倫理徳であるところの正義は情念にかかわるものでないことが言われるとともに、すべての倫理徳が情念にかかわるのではなくて、あるものは情念にかかわり、あるものは働きにかかわることが言われる。

第5項では、ある倫理徳は情念なしにありうるかどうかが問題とされる。たしかに、情

念にではなく、働きにかかわるところの倫理徳は情念なしにありうるし、正義はそのような倫理徳であることが認められるものの、正義の行為に伴う喜悦の満ち溢れによって、倫理徳はより完全であればあるほど、それだけ情念を生ぜしめることがあるのである。

*

第 60 問題の「倫理徳相互の区別」に関しては、大きく五つの項から成り立っている。

第 1　ただ一つの倫理徳があるだけか

第 2　働きにかかわる倫理徳は情念にかかわる倫理徳から区別されるか

第 3　働きに関してはただ一つの倫理徳があるだけか

第 4　異なった諸々の情念に関しては異なった諸々の倫理徳があるか

第 5　倫理徳は諸情念の異なった諸対象にもとづいて区別されるか

これらの項では、どのようなことが主張されるのであろうか。

第 1 項では、倫理徳は一つのものであるかどうかが問題とされ、倫理徳はただ一つではなく、多様な種がそこで見出される、ということが帰結する。

第 2 項では、諸々の倫理徳は、あるものは情念にかかわるものであり、あるものは働きにかかわるものである、というように区別されるものであるかどうかが問題とされ、互いに区別されるものであることが言われる。

第 3 項では、働きに関してはただ一つの倫理徳があるかどうかが問題とされ、それに対してはただ一つの倫理徳だけではないことが言われる。

第 4 項では、異なった諸々の情念に関しては異なった諸々の倫理徳があるかどうかが問題とされ、すべての情念については、ただ一つの倫理徳が見出されるのみであるとすることは不可能であることが言われる。

第 5 項では、倫理徳は諸情念の異なった諸対象にもとづいて区別されるかどうかが問題とされ、異なった諸情念にもとづいて倫理徳が区別されうることが言われる。

こうして、あくまでもアリストテレスの区分に従えば、情念にかかわるものとして十個の倫理徳があることが明らかであり、そこに働きにかかわる徳である正義を加えれば、全部で十一個あることになる。

*

以上、第 57 問題から第 60 問題において、アクィナスの徳の分類について順を追って見てきたが、次に、本論文の主題である「枢要徳」について見ることにしよう。

4．枢要徳とは

第61問題の全体は、「枢要徳」について当てられており、その「枢要徳」に関しては、大きく五つの項から成り立っている。それは具体的には次のようなものである。

第1　諸々の倫理徳は枢要的もしくは主要的と呼ばれるべきか

第2　それらの数について

第3　どのようなものがあるか

第4　それらは相互に異なっているか

第5　それらが国家社会的、浄化的、浄魂的、および範型的諸徳へと分類されるのは適当であるか

これらの項では、どのようなことが主張されるのであろうか。

ところで徳については、これまでに、そもそも徳とはいかなるものであるかということが問われ、次いで、徳はどのようなところに成立するかということが問われ、その後で、徳における分類が問題とされたのであるが、その分類については、徳は大きく知的徳と倫理的徳とに分けることができるのであった。

この第61問題においては、枢要徳または主要徳と呼ばれるのはどのような徳であるかということが問題とされるのである。

そこで、ここでも第1項から順に見ていくことにしたい。

第1項では、諸々の倫理徳は枢要的または主要的と呼ばれるべきかどうかということが問題とされる。それに対して、主文では、まず、徳とは人間的な徳であり、人間的な徳において徳の完全な意味に即して語られるのは、欲求が正しいものであることを要求するような徳であることが言われる。そのような徳は、単に善く行為する技能をつくりだすだけでなく、善い行為の実行そのものを生ぜしめるものであり、そのような欲求の正しさをふくむような諸徳が主要的なものである。それに当たるのは、まさしく倫理徳に他ならないのであって、知的徳のなかでは、知慮だけがそれに当たることが言われるのである。知慮も、それがかかわることがらにもとづいて、何らかの意味で倫理的徳なのである。かくして、主要的または枢要的と呼ばれる徳は倫理徳のうちに位置づけられることが適切なのである。

第2項では、四つの枢要徳が存在するかどうかということが問題とされる。枢要徳が四つであるというのは果たして妥当なのか、そのうちのいずれかが他のものよりも優っているのではないかということが問題とされる。それに対して、主文では、四つの枢要徳が、

形相的原理に基づいても、また、基体に基づいても、見出されることが言われるのである。こうして、知慮、正義、節制、剛毅の四つの枢要徳が存在することが主張されるのである。

第 3 項では、これまで述べられた徳よりも、主要的または枢要的と言われるのに相応しい徳が存在するのではないだろうかということが問題とされる。たとえば、高邁、謙遜、忍耐といった徳こそが主要的なのではないかと異論では言われる。

それに対して、主文において、知慮、正義、節制、剛毅は主要的であると言われるが、その例を示すならば、理性による考察を善く為さしめるような徳はすべて知慮と呼ばれ、諸々の行為において負目および正しさという善を実現させるような徳はすべて正義と呼ばれ、情念を抑制し、制御する徳はすべて節制と呼ばれ、何らかの情念に対抗して霊魂を堅固なものとする徳はすべて剛毅と呼ばれる、という如くである。

第 4 項では、四つの枢要徳は異なった徳ではなく、相互に区別されていないのではないかということが問題とされるが、それに対して、主文において、これら四つの枢要徳は相互に区別されることが言われる。

第 5 項では、四つの枢要徳が国家社会的、浄化的、浄霊的、範型的徳へと分類されることの妥当性が問題とされ、それに対して、主文において、その妥当性が言われるのである。

以上、五つの項を通して、四つの枢要徳およびその性格について明らかにされた。

5．対神徳とは

これまでの記述によって、アクィナスにおける徳及び枢要徳の性格については明らかにされたが、アクィナスの徳については、これ以外に対神徳と呼ばれるものがあり、それについて第 62 問題で述べられているので、ここでは簡単に触れておくことにしたい。

第 62 問題の全体は、「対神徳」について当てられており、その「対神徳」に関しては、大きく四つの項から成り立っている。それは具体的には次のようなものである。

第 1　対神徳なるものが存在するか

第 2　対神徳は知的および倫理徳から区別されるか

第 3　対神徳はいくつあり、またどのようなものがあるか

第 4　それらの順序について

第 1 項では、対神徳なるものがそもそも存在するかどうかということが問題とされるが、人間がそれによって超自然的な至福へと秩序づけられるような、何らかの諸根源が神的に人間に付け加えられることが必要であり、そのような諸根源が対神徳と呼ばれる。

第2項では、対神徳とはどのような徳であるかということが問題とされ、それは、倫理的徳や知的徳のように、自然本性に即して人間に適合するものではなく、人間の本性を超えるものであると言われる。

第3項では、対神徳とは具体的にどのようなものであるかということが問題とされ、それは、信仰、希望、愛徳であると言われる。

第4項では、これら三つの信仰、希望、愛徳の間に何らかの順序のようなものがあるかということが問題とされ、順序には生成の順序と完全性の順序の二種類があり、生成の順序にしたがえば、信仰が希望と愛徳に先行するのでなければならないが、完全性の順序にしたがえば、愛徳が信仰と希望に先行する。

こうして第62問題において、知的徳と倫理的徳以外の対神徳なるものが述べられることになり、これら三つをもってアクィナスの徳全体を構成することになる。

ここで今一度本題に戻り、アクィナスの枢要徳について見ることにしたい。

6．アクィナスの枢要徳

それでは、アクィナスの枢要徳についてはどのような特徴が見られるのであろうか。アクィナスにおいても、それが具体的には知慮、節制、剛毅、正義の四つの徳を指していることには何ら異なるところはない。もともと、それは、古代ギリシア哲学に由来するものであり、ことに、アクィナスの場合、アリストテレスからの影響を受けていることは明白なことである。ただ、ここでは、アウグスティヌスからの影響という視点から、アクィナスの枢要徳の特徴に迫ることにしたい。

今回取り上げた第55問題から第62問題に限定しても、アウグスティヌスの文献からの引用は相当あることがわかる。

たとえば、第55問題第1項第2＆第4異論、第3項反対異論、第4項第3異論＆反対異論、第56問題第1項第1異論、第3項第1異論、第4項第3異論、第57問題第3項第1異論、第58問題第2項第1＆第3異論、第59問題第2項反対異論＆主文、第3項主文、第5項第3項、第61問題第4項反対異論、第5項主文、第62問題第2項第3異論などにその引用は見られる。

アウグスティヌスの文献では、『カトリック教会の道徳』『自由意思論』『神の国』からの引用が多く見受けられるが、そこには、じっさいにはアウグスティヌスからの直接の引用ではなく、かれの名前のもとに知られているものも含んでいる。

アクィナスが引用してくるアウグスティヌスの言葉（じっさいはアウグスティヌスの言葉と見なされた言葉も含んでいる）から、とくに重要なものと思われるものを取り出してみるとおよそ次の通りである。

・徳は愛の秩序である
・徳は自由意思を善く行使することである
・徳とはそれによって人が正しく生活し、なんびともそれを悪用することはなく、それをわれわれのうちに・われわれなしに生ぜしめるのは神であるところの、精神の善い質である
・徳とは人がそれによって正しく生きるところのものである
・すべての徳は愛である
・なんびとも徳を悪しく用いることはない
・徳は正しく生きるための技術である
・徳は愛そのものの異なった諸情動に応じて四個に区分されたものとして語られる
・霊魂は、そのうちに徳が生まれ出ることが可能となるように、何かに従うことが必要である。ところが、この何かとは神であり、そして、もしわれわれがかれに従うならば、われわれは善く生きるであろう
・四個の枢要徳は愛の秩序である

むろんこれらの言葉は、異論や反対異論や主文と、さまざまな箇所で取り上げられており、アクィナスがそれらの言葉をただちに肯定的に捉えているということはできないが、少なくとも、アクィナスの徳の思想を形成する上で、何らかの役割を果たしていると考えることは可能である。

今試みに、アクィナスが引用しているアウグスティヌスの言葉を大きく三つのグループに分けてみると次のようになる。

（1）徳は愛である

「徳は愛の秩序である」「すべての徳は愛である」「四個の枢要徳は愛の秩序である」「徳は愛そのものの異なった諸情動に応じて四個に区分されたものとして語られる」の言葉を集約すると、このようになると考えられる。

徳は愛であるという観点から捉えていくのは、アウグスティヌスの『カトリック教会の道徳』等に典型的に見られるものであるが、アクィナスもこの観点を否定しているわけではなく、むしろ根本的には踏襲していると考えられる。また、枢要徳を愛そのものの異なっ

た諸情動に応じて四個に区分しようとする、枢要徳の区分の発想を否定しているわけでもない。

ただ、アウグスティヌスが、愛について、そこに amor も dilectio も caritas もすべて包含してしまうような捉え方をしていることに対しては、少ならず慎重な態度を取っていると思われる。第 62 問題第 2 項異論解答 3 では、「愛徳 caritas は愛 amor であるが、すべての愛が愛徳であるわけではない。すべての徳は愛の秩序であると語られるとき、…そのことが一般的な意味での愛についてであるとしたら、いずれの枢要徳についても秩序にかなった情動が必要とされ、すべての情動の根元および根源は愛であるかぎりにおいて、いずれの徳も愛の秩序であるというふうに言われる。そのことが愛徳という愛についていわれていると解するならば、…他のすべての徳はある仕方で愛徳に依存している、という意味に理解すべきである」と述べられており、対神徳のうちに愛徳 caritas を位置づけるアクィナスからすると愛の意味を厳格にしながら、修正を加えていることは当然であったと思われる。

（2）徳とは人がそれによって正しく生きるところのものである

「徳とは人がそれによって正しく生きるところのものである」「なんびとも徳を悪しく用いることはない」「徳は自由意思を善く行使することである」「徳は正しく生きるための技術である」「徳とはそれによって人が正しく生活し、なんびともそれを悪用することはなく、それをわれわれのうちに・われわれなしに生ぜしめるのは神であるところの、精神の善い質である」の言葉を集約するとこのようになると考えられる。

徳とはそれによって人が正しく生きるところのものであるという考えは、アクィナスも、全体的には、アウグスティヌスから重要なものとして継承しているということができるであろう。

ただ、徳を正しく生きるための技術であると捉えたり、徳を精神の善い質であると捉えたりすることについては、誤解を生みやすいことであることをアクィナスは認識しており、徳が正しく生きるための技術であるという場合の技術とは正しい理性と呼ばれるもののすべてを意味するような一般的な意味に解するべきであると説明し、徳を精神の善い質であるという表現については、むしろ精神の善い習慣と変更した方が適切であると述べている。

（3）魂は神に従うことによって徳が生じてくる

「徳とはそれによって人が正しく生活し、なんびともそれを悪用することはなく、それをわれわれのうちに・われわれなしに生ぜしめるのは神であるところの、精神の善い質で

ある」「霊魂は、そのうちに徳が生まれ出ることが可能となるように、何かに従うことが必要である。ところが、この何かとは神であり、そして、もしわれわれがかれに従うならば、われわれは善く生きるであろう」の言葉を集約するとこのようになると考えられる。

魂は神に従うことによって、徳が生じてくるという捉え方は、アクィナスにも間違いなく継承されている。ただ､アクィナスはこのことから､次のような思想を展開している（第 61 問題第 5 項主文)。

「神のうちに万物の理念が先在しているように、人間的な徳の範型が神のうちに先在しているのでなければならない。したがって、徳はこのようなものとして考察されることが可能であり、つまり、範型因的に神のうちに存在するかぎりにおいて考察されうる。そしてこのような意味で範型的な徳が語られる。すなわち、神的精神そのものが神において知慮と呼ばれる。これに対して、神における節制は神的精神の志向が自分自身へと転じられることであり、それはわれわれにおいて、欲情的な欲求能力が理性に合致せしめられることからして、節制が語られるのと同じである。他方、神の剛毅とはその不可変性である。また神の正義とは、神がその業において永遠法を遵守することに他ならない」と述べている。

これはアウグスティヌスの思想をベースにしながら、マクロビウスなどの流れも重視した結果、アクィナスにおいて結実したものであると言ってもよいであろう。

おわりに

以上､13 世紀の神学者であるアクィナスの『神学大全』第 II-I 部を中心に､その「枢要徳」の理解をみるとともに、アウグスティヌスとの比較を通して、浮かび上がってくる特徴についても考察した。

アクィナスとアウグスティヌスとでは、時代的にも 900 年近くの隔たりがあり、また、置かれた状況や立場もいろいろと違うこともあるので、安易な比較は慎まなければならないが、そうはいいながらも、アウグスティヌス的なキリスト教的伝統はアクィナスにも流れていることを確認することができた。ただ、対神徳についての思想は、アウグスティヌスにおいては、まだ明確な形を取っているとは言い難いために、そこには、言葉上の加筆修正を行うような形で受容していくことが必要であったであろう。また、枢要徳の思想に関するかぎりでは、アウグスティヌスにとっては、ストア的な影響は見られるものの、アリストテレスとの関係はほとんど見られず、その点では、アリストテレスの強い影響が見

られるアクィナスとはその捉え方に違いが出てくることも当然であったと考えられる。

註

1．『神学大全』日本語訳については、原則として、『神学大全』第 11 冊（稲垣良典訳、1980 年、創文社）を用いる。

本論文は、2019 年度名古屋柳城短期大学奨励研究による研究成果の一部である。

Aquinas on Cardinal Virtues in *Summa Theologiae* I-II

Kikuchi, Shinji*

トマス・アクィナス（以下、アクィナスとする）は、古代ギリシアに遡源し、教父や中世の神学者にも大きな影響を与えることになる「枢要徳」についてどのように理解しているのだろうか。本論では、『神学大全』第II-I部における叙述を中心に考察をしていく。

徳とはそもそもいかなるものか、徳はどこに成立するのか、徳にはどのような分類が可能であるか、ということが検討された後に、知慮、節制、剛毅、正義という「枢要徳」についての考察がなされるとともに、信仰、希望、愛といういわゆる「対神徳」とも区別される。

アクィナスの枢要徳については、アリストテレス的な枠組の中で思索が進められているが、一方で、アウグスティヌスからの影響も小さくなく、とくに、徳を愛との関係で捉えることについては、修正が加えられながらも、アクィナスに大きな影響を及ぼしている。

キーワード：*枢要徳，知慮，節制，剛毅，正義*

**Nagoya Ryujo Junior College*